



生活支援看護学応用実習I(地域看護学分野)における 学生の学びとその到達点の検討(第2報)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大川, 聡子, 松尾, 理恵, 和泉, 京子, 上野, 昌江, 土田, 妙子, 甫喜本, 光 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005602

研究報告

生活支援看護学応用実習I（地域看護学分野）における
学生の学びとその到達点の検討（第2報）

Awareness of public health nurse activity in applied clinical nursing of
community health nursing I for students (Second report)

大川 聡子・松尾 理恵・和泉 京子・上野 昌江・土田 妙子・甫喜本 光

Satoko OKAWA, Rie MATSUO, Kyoko IZUMI, Masae UENO,

Taeko TSUCHIDA, Mitsu HOKIMOTO

キーワード：保健師実習，学生，学び，地域看護学実習，精神看護学実習

Key words: Public health nursing, Students, Learning, Community health care nursing clinical practice,
Mental health nursing clinical practice

Abstract

The present study was performed to analyze students' awareness of the key points of learning of the Applied Clinical Nursing of Community Health Nursing I course and to develop a clear understanding of the activities of Community Health Nursing in our curriculum. Data were obtained from 69 students each participating in Applied Clinical Nursing of Community Health Nursing I curriculum that includes Community Health Care Nursing and Mental Health and Psychiatric Nursing Clinical Practice.

In this course, the students learned the importance of support taking into consideration the various community services and the development of an understanding of the patient's life on leaving hospital.

In addition, students learned the importance of respecting the will of the individual and supporting the individual's activities of daily living. In comparison with "Public Health Nurse's essential ability and contents" reported by Kanagawa et al., this course includes many items related to Basic ability, which have increased compared to the previous year's course. However, there were very few items related to Research and analysis ability in Basic ability and Analysis and decision ability in Understanding the community and support ability. From the results of this study, we should more cooperate with public health nurses and consider seminars to build closer connections with clinical practice.

要 旨

本研究の目的は、生活支援看護学応用実習Iにおける学生の学びの分析を行い、統合カリキュラムにおける地域看護学分野の活動の学びについて明らかにすることである。対象は、生活支援看護学応用実習Iを選択した学生69名である。

実習を通じて、学生は地域の様々なサービスの現状を知り、医療機関が退院後の生活を理解して援助することの重要性を学んでいた。また、個人の意思を尊重し、その人らしいよりよい生活を支援することを学んでいた。金川ら（2005）の提示した「保健師の必須能力とその内容」との比較では、「基本的能力」に対応するカテゴリーが平成17年度と比較し増加したが、「基本的能力」の「研究・分析能力」と「地域の理解と支援能力」の「分析・判断能力」が少なかった。これらの結果から、今まで以上に実習地の調整を行い、学内演習と実習を効率的かつ効果的に連携させていくことが示唆された。

I. はじめに

大学における保健師教育は、殆どが4年制課程で保健師免許を取得できる統合カリキュラムによって行われているが、大学の増加とともにさまざまな問題が指摘され

ている。保健師養成機関の現状を見ると、平成17年の保健師養成大学数は、10年前と比較してほぼ3倍となっており、定員数も年々増加している。しかし、国家試験合格者数は、大学は短期大学専攻科、養成所と比べて合格率が最も低くなっている。また、新卒者のうち保健師として就業する者の割合は、17年は大学が409人（6.9%）、養成所・短期大学専攻科が385人（30.3%）で

あり、大学は保健師資格を取得しても養成所・短期大学専攻科と比較して、保健師として就業する割合は少ない。また保健師養成施設の増加から、実習施設の確保も困難な状況となっている（週刊保健衛生ニュース、2006）。

こうした背景を踏まえ、大学教育における地域看護学教育について、島内（2003）は、活動対象と活動のプロセスを組み合わせ、ニーズに最も適した方法を選択するダイナミズムを学生が理解するには、講義のみならず、演習や実習において体験したことを総合的にとらえさせることが重要であると述べ、実習や演習の重要性を強調している。また木村ら（2005）は、地域看護学実習において、今まで漠然としていた基本理論や活動方法を地域看護学実習において具体的な事象で確かめ、臨地の場で理論と実践の統合が図られることが教育効果を上げるとしている。学生は実習を経てより深く保健師の役割を理解することができると考えられるため、実習での学生の学びを促す教員、実習指導者のかかわりは重要である。

本学では開学以来、保健師と看護師の統合カリキュラムに基づき地域看護学実習を行っている。その内容は、平成15年度入学生から3年次前期に地域診断の演習を行い、大学周辺地域の健康課題について考察し、4年次の応用実習では実習地域の地区視診や地域のデータ収集、分析を行った。

筆者らは、平成17年度地域看護学実習について学生の学びの分析を行った（大川ら、2005）。その結果から、実習を通して学生自身が生活者としての視点を養い、住民の主体性を引き出すエンパワメントの理念について具体的に体得できていることが推察された。また、学生は看護を医療機関の中だけで捉えるものではなく、人々の生活する場を中心にしてとらえていくことができていた。

本研究は、それらの結果を踏まえ、カリキュラム変更があった平成18年度実習についても継続して学生の学びの分析を行い、統合カリキュラムにおける地域看護の学びを明らかにし、今後の実習の改善に向けて検討していきたい。

II. 研究方法

1. 生活支援看護学応用実習Iの概要

平成18年度は生活支援看護学応用実習Iとして、「地域における公衆衛生看護活動（精神保健活動を含む）について理解するとともに、地域特性を踏まえ保健・医療・福祉と連携しながら個人、家族、地域を対象とした看護活動を展開できる能力を養う」ことを目的に4週間の実習を行った。実習施設は10ヶ所であり、そのうち政令指定市・保健所中核市6ヶ所、保健所とその管轄する市町村が4ヶ所であった。各グループの学生数は6～7名である。学生が取り上げた地域の健康課題は母子領域が7件、成人領域が2件、難病領域が1件であった

（表1）。実習内容は、設定した地域の健康課題に沿って実習中に取り組む対象領域（母子、成人等）を中心とした保健事業の参加や家庭訪問（3件以上）、健康教育（1回以上）である。また平成18年度の実習では、4週間の実習中に地域で行われている精神保健事業への参加、精神事業担当者（精神保健福祉相談員、精神担当保健師）から、精神保健事業の概要について話を聞く、地域の精神障害者社会復帰関連施設（精神障害者授産施設、精神障害者地域生活支援センター等）の見学等も行った。これらの実習内容と実習を実施した地域の健康課題に対する考察をまとめ、グループごとに実習報告会資料を作成し、それをもとに、実習最終日に同時期に実習した学生と実習指導者、担当教員で実習報告会を実施した。

2. 方法

1) 分析に用いた資料

本研究で分析した資料は、平成18年度生活支援看護学応用実習Iを選択した69名10グループが、実習中に作成した実習報告会資料と、実習終了後に学生各自が記入したアンケートである。自記式アンケートは、実習終了時に、学生に自記式アンケートを配布し、後日回収した。アンケートの内容は、①保健師の活動で印象に残っていること、②実習テーマを主体的に選択できたか、③実習の学びから、今後の進路に役立てたいこと、④その他である。

2) 分析方法

- (1) 実習報告会資料の中で、“実習での学び”を表していると思われる部分を研究者同士で抽出し、その内容を解釈しながら類似するものを集め分類した。内容別に分類したものを徐々に抽象度を上げながら、整理、統合、類型化しカテゴリーとした。
- (2) 類型化したもののうち、具体的内容について金川ら（2005）が作成した「保健師の必須能力とその内容」との関連を検討した。また、平成17年度と平成18年度の学生の学びについて比較するために、大川ら

表1 平成18年度4年次学生の実習テーマ

地域	テーマ分類	実習テーマ
A	母子	初めての子育てに対する支援 (妊娠期から乳児期)
B	母子	地域において子育ての孤立を防ぐ
C	母子	母子事業全般
D	成人	生活習慣病予防
E	成人	壮年期の生活習慣病予防
F	母子	安心して地域で子育てができる街づくり (母子ハイリスク要因の把握、虐待予防)
G	母子	低出生体重児について
H	母子	育児不安について
I	母子	母と子の生活リズムについて
J	難病	難病患者のニーズと保健師のアプローチ

(2005) が平成17年度に保健師活動の学びについて、抽出した小カテゴリーと「保健師の必須能力とその内容」とを関連させた結果と今回の結果についても比較、検討した。

- (3) 自記式アンケートについても内容毎に類似するものを集め分類した。分類した内容を徐々に抽象度を上げてカテゴリー別に類型化した。

分析は複数名の担当教員で行い、実習に従事した教員5名の意見の一致をみるまで検討を繰り返した。

3) 倫理的配慮

学生に対しては、実習最終日の報告会終了後、研究者が自記式アンケート配布時に、本研究の目的、報告会の資料やアンケートの内容を研究に用いること、個人名や施設名が特定されないようプライバシーを充分配慮すること、研究協力の有無により成績等学生が不利益をこうむることがないことを口頭および書面にて説明し、同意できない場合は教員に連絡するよう伝えた。アンケートの回収をもって同意を得たとした。

また分析に際しては学生個人のプライバシーに留意し、学生個人と実習施設が特定されないよう配慮した。

III. 結果

1. 実習報告会資料の分析

実習報告会の資料から抽出した学生の学びの全体像について表2に示す。抽出された項目は全部で149件であった。そのうち120件が地域における活動の理解に関するもの、29件が専門職に求められていることの理解に関するものだった。

地域における活動の理解は、学生が実習中に学んだ保健師やその他の援助者が地域で行う支援の実際であり、地域保健活動における対象、時期、内容に関することであった。対象では【活動対象の幅広さ】が、時期では【タイムリーに関わる】が導き出された。また内容には【生活を支援する】、【状況に応じて支援する】、【住民の力をのばす】、【広く積極的に連携する】、【データを活用する】の5つがカテゴリーとして抽出された。専門職に求められていることの理解は専門職に必要な知識や能力等で、【地域の保健師に求められていること】と、【医療従事者が地域を知ることが必要】の2つであった。【】はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリー、「」は具体的な内容である。

1) 地域における活動の理解

(1) 【活動対象の幅広さ】

「対象となっても参加できていなかったり、対象にすらあがってこない場合の方が深刻である」や「子どもや母親だけが対象ではなく、暮らしている家族全員が地域保健の対象である」といった〈広い視野で総合的に対象を理解する〉、〈対象は潜在するニーズも含めた地域全体である〉と幅広く対象をとらえていた。また、「広く総

合的に対象をとらえる」といった対象の理解があった。

(2) 【タイムリーに関わる】

「早期にかつ継続して関わる」ことや、「保健師やその他のサポートは、あくまでも補助として前面に出ず、必要ときに援助をすることが必要」等の活動の時期として〈タイミングが必要である〉、〈継続的に関わり続ける〉をあげていた。

(3) 【生活を支援する】

「個別に一人一人しっかり対応することが、その人の家族を支え、地域を支えていくことにつながる」や、「対象者のペースに合わせて支援し見守っていくことが大切である」等の〈その人らしい生活を支援する〉ことと、「保健師はその当たり前の生活をよりよいものにするための支援を行う職種である」に代表される〈当たり前前の生活を支援する〉であった。

(4) 【状況に応じて支援する】

「保健師の活動は人の一生に沿って途切れることなく行われている」といった〈生涯を視野に入れた支援〉の必要性と、「事業を円滑に進めていくために準備や反省をしてよりよい事業にしていけることも保健師として大切な役割だ」、「健康教育は対象者の反応を確認しながら、その人の置かれている状況に応じて対応していく必要がある」等の〈状況に応じた柔軟な支援〉のあり方であった。また、「虐待する側への援助」や「障害者と接する機会の重要性」等の〈社会的弱者への専門的な支援〉があった。

(5) 【住民の力をのばす】

【住民の力をのばす】は、「事業に参加している住民から、その他の住民に波及するような働きかけが大切である」や「地域での協力者を育て、その人たちの力を存分に生かすことが重要である」等の〈住民の力を生かす〉や〈地域ネットワークで対象を把握する〉等、住民の力をのばし、地域全体の健康づくりへ発展させる専門職の活動を理解していた。

(6) 【広く積極的に連携する】

「行政という決まった枠組みの中で他機関と連携していくことの難しさが分かった」や「保健師は住民さん同士や、さまざまな専門職同士の間をとりもつ役目をしていることが多い」といった〈決められた枠組みの中をとりもつ役割〉と〈関係機関と広く連携する重要性〉であった。

(7) 【データを活用する】

「地元で得られた生活習慣のアンケート結果は、その地域の住民にとって身近なデータであり一略一自身と比較してとらえることができる」といった〈データを住民のものにする〉であった。

2) 専門職に求められていることの理解

(1) 【地域の保健師に求められていること】

〈鋭い感性をもつ〉、〈コミュニケーション能力を磨く〉、〈住民に近い存在になる〉、〈法的根拠を理解する〉、〈新

表2 実習での学び

カテゴリー		サブカテゴリー	具体的内容			
地域における活動の理解	対象	活動対象の幅広さ	対象は潜在するニーズも含めた地域全体である	潜在するニーズを支援する難しさ		
			広い視野で総合的に対象を理解する	対象は個人だけでなく、家族や地域全体		
	時期	タイムリーに関わる	タイミングが必要である	広く総合的に対象をとらえる		
			継続的に関わり続ける	様々な価値観を理解する必要性		
	内容	生活を支援する	その人らしい生活を支援する	地域はタイミングよく効果的に援助できる		
				必要な時に援助する	早期にかつ継続して関わる	
			当たり前の生活を支援する	地域では個人の意志を尊重したその人らしい生活が送れる		
				個別にしっかり対応する	個々に合わせた援助をする	
		状況に応じて支援する	生涯を視野に入れた支援	その人らしく生活することを支援する	より良い生活を支援する	
				当たり前の生活を支援する	当たり前の生活を支援	
				多岐にわたる専門分野	生涯を通じた支援	
				長期にわたる援助	事業の参加率を上げる	
			状況に応じた柔軟な支援	より良い事業のための前後の役割	具体的で結果に結びつく健康教育	状況に応じた健康教育
				集団のニーズ把握の必要性とアプローチの難しさ	家庭訪問の持つ有効性	援助方法
				社会的弱者への専門的な支援	虐待する側への援助	虐待への対応の難しさ
				意思表示をする大切さ	障害者と接する機会の重要性	障害者にとって社会資源は安心できる場
	住民の力をのばす	住民の力を生かす	住民による波及効果	住民の力を高める役割		
			地域ネットワークで対象を把握する	地域ネットワークで対象を把握する		
		住民の気づきや意識へ働きかける	育児仲間同士集まる意義	ピアの必要性	意識を変えることの難しさ	
			住民自らの気づきの必要性	正しい知識の普及、啓発の必要性	住民が予防意識をもつ必要性	
広く積極的に連携する		関係機関と広く連携する重要性	内部の連携	他機関、他職種との連携		
		決められた枠組みの中をとりもつ役割	連携と各機関の役割	連携を阻害する枠組み		
データを活用する	データを住民のものにする	保健師による積極的なコーディネート	集団から個を見る視点			
		データを住民に還元	データを住民に還元			
専門職に求められていることの理解	地域の保健師に求められていること	鋭い感性をもつ	創造する力工夫し生かす力			
			鋭い感性	伝えようという熱意		
		コミュニケーション能力を磨く	高いコミュニケーション技術	知識とアドバイスの正確さ		
			知識とコミュニケーション能力、観察力	不安を引き出しくみ取る姿勢		
		住民に近い存在になる	信頼関係の重要性	相手に近づく		
			住民から学ぶ	地域に密着する		
			法的根拠を理解する	法律に基づく支援を考える		
			新しい社会資源の必要性を認識する	新しい社会資源の必要性		
		医療従事者が地域を知ることが必要	医療従事者が地域を知ることが必要	医療従事者が地域を知る必要性		

表3 「保健師の必須能力とその内容」と実習の学びの対応表

能力段階	構成する能力		平成18年度の対応表	平成17年度の対応表	
基本的能力	基礎能力	コミュニケーション能力・ 対人関係能力	人と関わる能力	高いコミュニケーション技術 不安を引き出しくみ取る姿勢 信頼関係の重要性 相手に近づく	関係づくりを重視する 信頼関係を構築する 対象者の不安を受け止める
		意思決定能力（判断能力）			
		自己管理（教育）能力			
		統合力	問題を総合的に理解する		
		独創性、発信力	創造する 新しい考えを生み出す 周囲へ発信する	創造する力工夫し生かす力 正しい知識の普及、啓発の必要性	
		倫理性			
	専門 基礎能力	柔軟性		様々な価値観を理解する必要性 状況に応じた健康教育	柔軟に対応する
		保健師としてのアイデンティティ	専門性の自覚	伝えようという熱意	
		洞察力、予測・推察力、予防能力	潜在的問題をとらえる	潜在するニーズを支援する難しさ 長期にわたる援助 鋭い感性	
		組織的・管理的能力	組織的に解決をはかる	内部の連携	
地域で生活する 人々（個人・家 族）の理解と支 援能力	分析・ 判断能力	情報収集能力	個人から全体を捉える 個人・集団・地域を関連づけ て捉える 生活と関連づけて捉える	対象は個人だけでなく、家族や地 域全体	支援が必要な対象を把握する
		情報分析能力	専門的・創造的・独断的な判 断	知識のアドバイスの正確さ 知識とコミュニケーション能力、 観察力 広く総合的に対象を捉える	専門的知識が必要 客観的判断で評価する 幅広い視点を持つ
	実践能力	ケア提供能力	基本的看護技術の提供 セルフケアを支援する 個人・集団の力量形成	その人らしく生活することを支援 する 育児仲間同士集まる意義 ピアの必要性 具体的で結果に結びつく健康教育 集団のニーズ把握の必要性とアプ ローチの難しさ 必要ときに援助する 早期にかつ継続して関わる 地域に密着する	個別のニーズに合わせた支援 適切な時期に対応する 社会資源の利用を促す 住民に身近な存在となる 対象にあったフォローをする 継続的にかかわる 個を集団へつなげる 地域での生活を支援する 地域のリーダーを育成する 住民の主体性・積極性を生かす 住民の主体性への働きかけ
		地域の情報収集能力	保健指標 生活者の声を引き出す 実態調査	データを住民に還元	地域全体を視野に入れる
地域の理解と支 援能力	分析・ 判断能力	地域の情報分析・活用能力	根拠に基づいて地域の健康課 題を把握する 保健計画・事業の企画立案・ 評価		体系的に事業を行う
		実践能力	地域へのケア提供能力	生活者と協力・協働する （パートナーシップ） 社会資源の開発 社会資源の質・量の管理 住民の力量形成（まちづくり） 住民の権利擁護	地域ネットワークで対象を把握する 住民による波及効果 住民の力を高める役割 新しい社会資源の必要性 住民から学ぶ
地域健康開発・ 改革・改善能力	実践能力	調整能力	関係機関との交渉・調整能力 ケアマネジメント能力	他機関、他職種との連携 連携と各機関の役割 保健師による積極的なコーディネ ーション	他機関との連携
		組織化能力	ネットワーク化 公共性の高い問題を判断する		
		政策施策化能力	地域の問題を施策化に結びつ ける 行政施策を企画する 根拠を示して説明できる 予算を確保する		
		健康危機管理能力	健康危機への対処（災害・感 染症等） 危機の予防		

しい社会資源の必要性を認識する)の5つがあった。多
かったのは、「対象者のサインをキャッチすることの重
要性」といった〈鋭い感性をもつ〉や、「アドバイス、

指導するだけでなく、自然に話を盛り込みながら進めて
いくことが大切だ」に代表される〈コミュニケーション
能力を磨く〉であった。また、「地域の住民さんたちと

の連携の基礎には、保健師との信頼関係がある」、「地域に密着して母親のニーズに答え支援することで、育児の不安を軽減し楽しく子育てできる」等の〈住民に近い存在になる〉こともあげられた。

(2) 【医療従事者が地域を知ることが必要】

「地域の状況を常に把握し、退院後の患者の地域での生活をイメージしながら、地域の保健師等のスタッフや各関連機関と連携を取りながら看護を提供していく必要がある」とあるように、地域を医療機関の中で活動する看護職の立場からとらえたカテゴリーであった。

3) 保健師基礎教育のコアカリキュラムとの比較

実習報告会の資料から抽出した学生の学びの具体的な内容を、平成17年度と同様に金川ら(2005)が作成した「保健師基礎教育のコアカリキュラム」の「保健師の必須能力とその内容」と比較し検討した。金川らの「保健師の必須能力とその内容」の右に、対応する平成18年度と平成17年度の学生の学びの内容を示した(表3)。

実習から得た学生の学びは全体的に「保健師の必須能力とその内容」の「基本的能力」から「地域健康開発・改革・改善能力」まで幅広く金川らの必須能力に対応していた。その中でも特に「地域で生活する人々(個人・家族)の理解と支援能力」の「実践能力」と「地域の理解と支援能力」の「実践能力」に該当するカテゴリーが多く存在した。しかしながら、「基本的能力」とされている、「意志決定能力(判断能力)」、「自己管理(教育)能力」、「統合力」、「倫理性」と「専門基礎能力」の「研究・分析能力」や「地域の理解と支援能力」の「地域の情報分析・活用能力」、「地域健康開発・改革・改善能力」の「組織化能力」、「政策施策化能力」、「健康危機管理能

力」には、本学の学生の資料からは該当するカテゴリーを見出すことができなかった。

また、平成17年度の学生の学びと比較すると、「基本的能力」の「基礎能力」のうち、「独創性、発信力」と、「専門基礎能力」のうち、「保健師としてのアイデンティティ」、「洞察力、予測・推察力、予防能力」、「組織的・管理的能力」に該当するカテゴリーは、新たに追加されていた。「地域の理解と支援能力」の「分析・判断能力」である、「地域の情報分析・活用能力」に該当するカテゴリーは平成18年度は見出せなかった。

2. 自記式アンケート結果の分析

アンケートの配布数65部、回収数62部で、回収率は94.2%であった。「実習において、保健師の活動で最も印象に残っていること」は、保健師の対象者への接し方と参加した事業・活動に関するものが大部分であった。保健師の対象者への接し方について表4に示した(複数回答)。「<」はカテゴリー、「」は学生の記述である。最も多かったのは、〈保健師の表情の優しさ〉であり、それは健診時、家庭訪問時の対象者と話をするとき等が挙げられていた。また学生に対してもきちんと接してもらった体験をしていた。コミュニケーションについての項目も多く、〈しっかり、丁寧に話を聞く〉〈いつでも、どこでも気軽に相談にのる〉〈コミュニケーションスキルをもっている〉等があった。参加した事業・活動のなかで印象に残っていることとして、家庭訪問に関することをあげている学生が最も多く16人いた。そのなかでは、「訪問を希望していない家庭に行って保健センターとつながりをつくった」「(学生で)単独訪問に行き、訪問の難しさと利点を感じた」と記述していた。それ以外の事業・活動では、健診の問診での「子どもの発達をきちんとみている」や「健診後のケースカンファレンスに参加し、それも活動の内容であることがわかった」と記述していた。事例検討の場面で保健師としての専門的視点を持っていること等をあげていた。また、保健師は事業を実施するだけでなく地域とつながりのある事業を企画・調整することを行っていることが理解できたことをあげている学生もいた。

実習を終えての今後の進路について表5に示した。〈保健師に関心を持ち、保健師をめざしたい〉が16人、保健師にはならないが、〈地域に目を向けることができる看護師になりたい〉15人であった。

表4 保健師の活動で最も印象に残っていること-対象者への接し方

n=62	
内 容	人 (%)
しっかり、丁寧に話を聞く	7 (11.3)
できていることをほめる	3 (4.8)
いつでも、どこでも気軽に相談にのる	6 (9.7)
表情がやさしい	8 (12.9)
相手の気持ちに添った関わりをしている	3 (4.8)
テキパキしている	1 (1.6)
コミュニケーションスキルをもっている	6 (9.7)
その他	4 (6.5)
複数回答	

表5 今後の進路について

n=62	
内 容	人 (%)
保健師に関心を持ち、保健師をめざしたい	16 (25.8)
地域に目を向けることができる看護師になりたい	15 (24.2)
対象者の生活を大事にする	3 (4.8)
複数回答	

IV. 考察

本大学では、旧カリキュラムでは3年後期の演習で実習地域の地域診断を実施し、4年前期に、3週間の地域看護学実習を実施していた。しかし、平成18年度からのカリキュラムによる実習では、生活支援看護学応用実習Iとなった。新カリキュラムでは、地域診断の演習は

3年前期に大学周辺地域で実施するため、実習地域は演習をした地域とは異なり、実習の事前準備が十分行えていないという課題がある。今年度初めて実施した新カリキュラムのもとでの実習における学生の学びを分析することは今後の実習を考えていくために重要であると考えらる。

1. 実習報告会資料からの分析

実習報告会資料の分析から、学生は地域における活動と専門職に求められていることについては、幅広く理解していることが示された。

まず、地域看護活動の特徴として、活動の対象や活動方法があげられる。今回の分析から、学生はこれらの特徴を感じ取ることができていたと考えられる。例えば、活動の対象として〈対象は潜在するニーズも含めた地域全体である〉は保健師活動の対象が目前にいる人だけでなく、潜在するニーズを持った地域の対象者や、個人や家族だけでなく、地域全体が対象であること等について学生は実習を通して捉えることができていた。また、地域では、具体的に目に見えにくい健康の保持・増進を支援することが重要である。〈当たり前の生活を支援する〉、〈継続的に関わり続ける〉は公衆衛生活動の一次予防の重要性を理解しているカテゴリーである。学生は短い実習期間であったが、そのような予防や健康増進の重要性を学んだといえる。また、地域は様々な人が生活する場であり、その人の価値観やライフスタイルを尊重しながら援助することが必要である。〈広い視野で総合的に対象を理解する〉とは、実習を通じ多数の様々な価値観を持つ対象に数多く出会う中で、学生が理解した幅広い対象の捉え方と考えられる。さらに、出生から死亡まで生活する場である地域ならではの視点である、〈生涯を視野に入れた支援〉、〈継続的に関わり続ける〉という視点も学んでいる。このように学生は、講義や演習で学習した地域の対象が疾病を持つ人だけでなく、あらゆる潜在的な健康問題を持つ人、家族、集団、地域全体であることについて、実習を通して捉えなおすことができていた。

地域における活動の特徴として学生は、〈状況に応じた柔軟な支援〉に代表される、保健師独特の活動方法に着目している。具体的には「事業の参加率を上げる」、「より良い事業のための前後の役割」にみられる保健師の企画運営能力や、「集団のニーズ把握の必要性とアプローチの難しさ」、「家庭訪問の持つ有効性」にみられる保健師特有の支援方法が含まれている。特に家庭訪問は、地域における特徴的な活動方法の一つである。アンケートからも参加した事業・活動の中で家庭訪問が保健師の活動として印象に残ったという記載が最も多かった。しかしながら、卒業時習得すべき実践能力について、学校の教員と地域の指導者に到達度を尋ねている調査（週刊保健衛生ニュース、2006）では、「家庭訪問の技術」に

ついて、地域は「一人でできる」を期待する割合が高いのに対し、大学は「指導下でできる」を到達度としており、乖離が見られている。単独訪問の実施については各実習施設の状況等により、実施できる場合とそうでない場合はあるが、なるべく学生単独で訪問を実施することにより、家庭訪問に必要な技術・能力を身につけることが重要である。熊谷ら（2004）は、家庭訪問により得られた住民の生活実態から捉えられた健康問題を、行政施策に反映させるプロセスやシステム化の重要性を伝えることによって、保健師の専門性についてさらに学びが深まると考えられると述べている。しかし、今回の実習資料分析からそれを見出すことはできなかった。単発の事業や家庭訪問を実施するだけでなく、同じ対象者に複数回家庭訪問する等、対象者への一貫した関わりを実施することができる場面を設定していくことも、今後の課題としてあげられる。

さらに、地域における活動の視点として3つの視点から考察する。1つは日本公衆衛生協会（2004）が述べている、保健師に求められるのは生活者としての感性や態度である。学生は「具体的で結果に結びつく健康教育」、「状況に応じた健康教育」のように、生活者の視点に立った具体的で効果的な教育の必要性を認識した。また、アンケートからも〈対象者の生活を大事にする〉という意見があげられたことから、実習を通じて保健師には「生活者」としての視点が求められることを理解したと考えられる。2つ目の視点として、「地域自体がエンパワーすること」（日本看護協会、2005）をめざす、地域住民のエンパワーという視点がある。学生が学んだ、〈住民の力を生かす〉、〈住民の気づきや意識へ働きかける〉、〈住民に近い存在になる〉はまさに住民の持つ力へ働きかけることである。その際、受け身でなく積極的に生活している住民の中に入っていくために、〈鋭い感性を持つ〉、〈コミュニケーション能力を磨く〉ことを保健師の能力として感じとっていた。さらに3つ目の視点として、地域の実情にあったシステムを構築していくことである。そのためには、古くからPublic Health Nurseは、患者と、患者を助けることのできる人をつないでいく「リエゾン・パーソン」である（宮崎ら、2006）といわれているように、関係機関との連携が活動の重要な位置をしめる。〈決められた枠組みの中をとりもつ役割〉は行政という組織の中で連携する難しさと、保健師が積極的にコーディネートしネットワークを構築している様子を示しているカテゴリーである。〈データを住民のものにする〉、〈新しい社会資源の必要性を認識する〉も、地域全体を見て新しい施策や資源をつくり出し住民に還元する等、行政で働く保健師活動を見ることで学んでいた。これらのカテゴリーは、学生が単に見学しただけでは理解しにくく、辻ら（2004）が「実習の中で保健師から直接聞くことにより、多くの保健師活動を学んでいる」と述べているように、地域システムづくりについて保健

師からの話を聞くことにより、理解が深まった結果であると考えられる。

今回、生活支援看護学応用実習Ⅰとして4週間の中に精神保健事業への参加や精神保健事業担当者から話を聞いたり、精神障害者社会復帰関連施設の見学も行われた。その学びとして〈その人らしい生活を支援する〉、〈法的根拠を理解する〉等が学生の学びとして導き出された。〈その人らしい生活を支援する〉は個人の意思を尊重し、その人らしいよりよい生活を支援することを意味する。高橋ら(2004)も社会復帰施設実習において、保健医療福祉関係者にとって精神障害者が地域で暮らすために、対象を援助する人という捉え方ではなく、対象の持つ力への気づきや施設の役割等を十分理解する必要があると述べている。学生は今回の実習を通して地域で生活する精神障害者に接することで、“患者”ではなく“ともに生活する人”という視点を持つことができたと考えられる。〈法的根拠を理解する〉は、平成18年4月から施行された障害者自立支援法の渦中での実習であったため、その影響が大きいと考えられる。しかしながら、地域における活動には全て法的な根拠に基づいて実施しており、今後も個への支援と法律を結びつけた理解を促す必要がある。

実習を統合カリキュラムで実施することで深まったこととして、《医療従事者が地域を知る必要性》がある。これは、病院実習だけではイメージしにくかった退院後の生活や社会資源の利用方法が、実習を経ることで具体的に理解できたのではないかと考えられる。また、家庭訪問で実際に生活している様子を見ることで、対象者の生活背景を理解して看護を行う重要性も認識できたと考えられる。これらのことは学生のアンケートで、保健師にはならないが、〈地域に目を向けることができる看護師になりたい〉と答えた学生が多かったことからもうかがえる。

2. 保健師基礎教育のコアカリキュラムとの比較

学生の学びを保健師基礎教育のコアカリキュラムに対応させた結果、「基本的能力」に対応するカテゴリーが平成17年度より多かった。これは、本研究は学生の学び全体を分析対象にしたのに対し、平成17年度は学生の学び全体のうち分析対象を保健師の活動に焦点をあてていたためと考えられる。

実習を通じ、学生は保健師の必須能力の必要性をほぼ認識していると考えられた。しかしながら、平成17年度は〈地域の特性を踏まえた支援〉というカテゴリーが存在したのに対し、今年度は該当するカテゴリーはなく、「基本的能力」の「研究・分析能力」と「地域の理解と支援能力」の「分析・判断能力」がおさえられていなかった。これは、平成17年度まで実習地の地域診断を3年次の演習で行っていたが、平成18年度はカリキュラム改正のため、演習では実際に実習を行う地域の地域診

断を実施せず、限られた実習期間内に実習地の地域診断を行ったためと考えられる。この点については、今後地域診断の実施方法を検討するとともに、打ち合わせ段階からの実習地との調整が今以上に必要になると考えられる。

しかし、平成17年度はなかった〈新しい社会資源の必要性〉や〈法律に基づく支援を考える〉という個をみて施策へ生かすという視点や、得られた〈データを住民に還元〉するという、個から集団だけでなく、集団から個をみるという視点がみられた。また、平成17年度とそれぞれのカテゴリーを比較してみると、〈支援が必要な対象を把握する〉から〈対象は個人だけでなく、家族や地域全体〉や、〈他機関との連携〉から〈保健師による積極的なコーディネート〉、〈住民とともに活動する〉、〈地域住民と一体になる〉から〈住民から学ぶ〉というように、カテゴリーの質が発展しており、より学生の学びが深まったとも考えられる。

V. 研究の限界

これらのデータは、学生の学びとして「実習報告会資料」に掲載されたもの、あるいは学生に対して行なった自記式アンケートの結果から分析しており、学生がこれらの能力について獲得することができたかについては不明である。しかし、学生がこれらの能力を保健師として活動していく上で必要であると認識していたことが推察された。また、金川ら(2005)が作成した「保健師の必須能力とその内容」と平成17、18年度の比較については、平成17年度が学生の学び全体のうち分析対象を保健師の活動に焦点をあてているのに対し、平成18年度は学生の学び全体を分析対象としているため、実習を通じて得た保健師の活動以外の学びについては、正確に比較、検討ができたとは言いがたい。しかしながら、平成17、18年度を通し、演習・実習内容が大きく変わったため学生の学びの到達点の比較は重要であり、今後、「実習報告会資料」や学生へのインタビュー・アンケートを通して、実習で学ぶことができた内容について、経年的により詳細に検討するとともに、実習内容の改善に役立てていきたい。

VI. 結論

本研究では、本学の生活支援看護学応用実習Ⅰにおける学生の学びの分析を行い、統合カリキュラムにおける保健師活動の学びについて明らかにした。実習を通じて、学生は地域の様々なサービスの現状を知り、退院後の生活を理解して援助することの重要性を学んでいた。また、個人の意思を尊重し、その人らしいよりよい生活を支援することを学んでいた。金川らの提示した「保健師の必須能力とその内容」との比較では、「基本的能力」に対

応するカテゴリーが平成17年度と比較し増加したが、「基本的能力」の「研究・分析能力」と「地域の理解と支援能力」の「分析・判断能力」が少なかった。これらの結果から、今まで以上に打ち合わせ段階から実習地の調整を行い、地域診断の実施方法を検討する等、学内演習と実習を効率的かつ効果的に連携させていきたい。

文 献

- 金川克子他：公衆衛生看護のあり方に関する検討委員会活動報告「保健師のコアカリキュラムについて」中間報告。日本公衆衛生雑誌, 52 (8), 756-764, 2005.
- 木村裕美他 (2005)：地域看護臨地実習における個別目標自己評価と実習指導方法の検討, 日本看護学会誌, 14 (2), 109-117.
- 熊谷幸恵他 (2004)：家庭訪問における相談援助技術から学んだ保健師の役割 - 3年制看護基礎教育における地域看護実習を通して -。日本看護学会論文集 (地域看護), 35, 104-106.
- 宮崎美砂子他 (2006)：最新地域看護学総論, 日本看護協会出版会, 東京.
- 日本看護協会 (2005)：新版保健師業務要覧, 日本看護協会出版会, 東京.
- 日本公衆衛生協会 (2004)：「できる保健師」を育てる条件 - 保健師教育を考える, 公衆衛生情報, 34 (12), 6-16.
- 大川聡子他 (2005)：地域看護学実習における学生の学びとその到達点の検討. 大阪府立大学看護学部紀要, 12 (1), 93-101.
- 島内節 (2003)：大学, 大学院における地域看護学教育のあり方, 保健の科学, 45 (5), 321-326.
- 週刊保健衛生ニュース 平成18年7月10日付
- 高橋香織他 (2004)：精神障害者の社会復帰施設実習での学び, 岐阜県立看護大学紀要, 4 (1), 65-71.
- 辻よしみ他 (2005)：地域看護学実習の展開方法の検討 実習評価表と実習レポートの分析から, 香川県立保健医療大学紀要, 1, 123-128.